

## 北満佳木斯よりの引揚げ

山口県 福永宣爾

戦後、六十年余りが過ぎようとしている。長かつたようでもあり、短かつたようでもある。終戦前後の体験を書き綴るに当たり、当時の私の周囲の出来事について、何分、紙に書き留めたものが皆無であり、ひたすら頭の中に残っているものを引き出すだけだが、薄れかけ、断片化した記憶をつなぎ合わせ、できるだけ当時の正確な事実を再現したいと思う。

### 一 生い立ちから終戦直前まで

父、福永康平は旧制中学校を卒業して最初の兵役終了後、既に満州に移住し、家庭を持っている長姉の福本ナツを頼って渡満、満鉄に入社した。

その後、母、平山トシ子と結婚、満州国建国の翌年、昭和八（一九三三）年四月、奉天（瀋陽）近郊の蘇家屯で長男の私が生まれた。満鉄職員は異

動転勤が激しく、そのあと撫順、満州里、白城子とそれぞれ一年足らずで住居を変えたようだが、私にはつきりと連続した記憶があるのは、満三歳であつた白城子以降である。

かねてより父は、中国本土に渡りたいとの念願を抱いていたようで、昭和十三年、旧知の有力者の招きで満鉄を離職して新民会に転職、満州を離れて華北に移住することとなった。既に日中戦争が拡大、泥沼化の様相を呈しつつあつたが、新民会は中国民衆に対する親善教化政策を推進する、日本の国策機関である。華北ではまず北京に約一年間住んだが、次いで父がその地の青年訓練所の所長に就任した定県に移転した。やがて、私は学齢期を迎えた。定県は電気が通じていない田舎町で、夜は石油ランプをともし牧歌的な面もある生活だったが、日本人の学校がない。

昭和十五年の春、石家荘に移転、その日本人小学校に入学したが、まもなく母が肋膜炎を患い、療養のため父を残して内地に一時帰国した。母の

実家のある北九州小倉の清水小学校に転校した。帰国中の昭和十六年二月に妹の恭子が生まれた。

内地在住約一年、母の健康も回復したので華北に戻った。次の居住地は保定であり、私は同地の日本人国民学校に転校した。生徒の約半数は朝鮮籍の子供たちだったが、内地出身の子と差別なく扱われていた。その中で、李雲竜君（日本姓古川）という名の、家を互いに行き来する親しい級友もできた。ところが、昭和十八年の春、新民会が解散となった。戦時下のことなので、いろいろと転職先はあったようだが、父は新民会と似かよった仕事である満州国協和会を選び、再度満州に戻ることとなる。

移住先の佳木斯は、満州国の東北端、三江省の省庁所在地であり、ハルビンを経由して黒竜江に合する東北満隋一の大河、松花江に面している。四年生になった私は、この朝日在満国民学校に転校した。昭和十九年六月には弟の隆が生まれた。

## 二 運命の日

昭和二十年の夏がきた。私は国民学校六年生になっていたが、既に小学生も高学年は夏休み返上となり、毎日登校していた。通常の授業も行われ、大半の時間は学校近くの畑での勤労奉仕や、小学生ながら木銃を担いでの軍事教練に当てられていた。

正確な日取りは思い出せないが、恐らくその日は八月九日だったと思う。朝、目覚めると母から「夜明け前に、遠くで何発か爆弾の音がしたけど聞こえたかね？」と聞かれた。私は寝入っていたので爆撃音には気付かなかったが、佳木斯郊外の駐屯部隊の兵舎が爆撃を受けたようだった。そのころは、既に鞍山の製鋼所など、南満は米軍機による空襲を受けていたが、とうとう北満にまで来るようになったのかと思った。

いずれ、米軍機による空襲がありうることは予想されていたが、学校でもし空襲があっても警戒警報が解除すれば、平常どおり登校するようにとの定めになっていた。しかし、当日は登校せず

に、指示があるまで自宅で待機するようにとの通知がきた。ソ連軍の攻撃だと判明したのである。

その日が境目であった。

戦局の急迫化と共に、生活物資も日に日に不足がちとなったが、内地に比べれば、まだはるかにましのものであり、空襲も受けず、戦火に直接さらされることもなく、戦時下とはいいながら平和な生活を送っていた。しかしこの日より、それまでの暮らしから完全に切り離され、非日常事態に突入することとなる。

この二カ月ほど前、年輩の予備役少尉の父にも赤紙がきて、錦州の砲兵隊に配属となった。父からは何度か手紙がきたが、南満への住居移転を促していた。父は入隊してから、独ソ戦終結後のソ連は大量の軍隊を動員し、極東地区に続々と集結しつつあるとの情報をつかみ、ソ連軍の満州侵攻が間近のことを察知していた。したがって、国境近くに残した留守家族が心配でならず、今のうちに少しでも安全な場所に避難させられないかと思

ったのである。

しかし、当時私信はすべて郵送途中で当局による開封検閲を受けていた。この措置をとることは一般にも発表されており、あわせて暗号文やあぶり出しなどは、一切使用しないようにとの達しが下されていた。防諜上の機密事項はもちろんのこと、当局が国民一般から秘匿している情報や、戦時下に有害であるとみなされる考えなどが記載された手紙類は没収され、これを書いた差出人もただでは済まされないので、状況を詳しくはつきりと書くわけにもいかない。別の理由をつけて、遠まわしにほめかす程度にしかできないので、母もその真意を図りかねて、「お父さんからこんなことを言ってきたけれど、どうしたものかね？」と悩んでいたが、そのころは既に住居移転は簡単ではなくなっていた。格別の理由がないと許可されない。そういうしているうちに、この日が来てしまったのだ。

やがて、市内在住邦人の大半の成人男子が現地

非常召集で駆り集められ、入隊していった。入隊の現地部隊は武器不足で、入隊した全員に行き渡るだけの装備品がないようだった。各自所持する武器をできるだけ持参するようにとのことで、猟銃や日本刀、中には何もないよりはましと空気銃を持って駆けつけた人もいたそうだが、これでソ連軍の最新鋭戦車軍団に立ち向かえるのかと、甚だ心もとない感じだった。

残された各家庭には、命令があり次第、いつでも即時避難できるように準備せよ、との通達が出された。協和会社宅の人々も、皆早朝に一日分の炊飯をし、夏場なので腐らないようにと、焼きおにぎりを作った。また母は、保存食としてかなりの分量の鉄火味噌を作った。味噌に炒った大豆と少量の人参、牛蒡などを細かく刻んで混ぜ合わせ、長時間かけて練りながら、ごま油で炒めて作るのだが、湯に溶かせば、そのまま味噌汁になる。また、ほかに調味料がなくても、これで何とかしのげる。醤油、酢、油などビン入りの液体調味料は

重くてかさばり、ビンが割れるおそれもあり、とても携行できない。塩は十分にあつたが、砂糖はときどき少量の配給がある程度で貴重品であった。食料品の次に何とかしなければならぬのは、金策である。避難途中で何が起こるか、避難先の生活がどうなるのか見当もつかない。だがお金さえあれば、何とか生き延びられるかもしれない。

しかし、預貯金は一切引き出せない状況であり、普通の給料生活者の家に、それほど手持ちの現金があるわけではない。物情騒然とした中で家財を換金することは難しく、時間的な余裕もない。住宅には朝鮮籍の協和会社職員の家族も移住していたので、母が大事にしていた和服類などを、ここで買い取ってもらうことができて幸いだった。当時の金で約三千円くらいになったようである。この人たちは、「私たちは内地の人と同じ扱いで避難させてはもらえないし、ほかに行く所も帰る所もないので、ここにどまることにする」と言っていたのである。日本人の家を回り歩いて、衣類を買

い集めている現地人の古着屋もいた。衣類や寝具をかき集めて売り渡したが、足もとを見られたのか、一度には運びきれないくらいの分量だったが、まとめて約五百円にしかならなかった。

十分とは言えないが、こうして得た現金があつたので、我々一家は新京（長春）に落ち延びるまでの期間、生き延びることができた。

一時は、「佳木斯在住邦人の避難を取りやめ、残留することになった」との通達が出されたが、これを聞いたときは何かほつとした。重い荷物を担いで逃げ出さなくても済む。家族もろとも敵を迎えうって全員玉砕し、国と運命を共にするのだと安らかな気持ちになった。しかし、その後再度方針が変更され、直ちに避難を開始することとなった。婦女子主体の邦人が市内に残留することは、軍の作戦遂行に支障をきたすとのことだった。やれやれ、やはり逃げ出さなければいけないのかとうんざりしたが、軍の命令には逆らえない。しかし、もしこの方針再変更がなかったならば、や

がて我々の身に凄まじい悲劇が襲いかかり、今日、この引揚げ労苦記録を書くこともできなかつたであらう。

次々と順番を待つて、列車による避難が開始された。それと同時に、主のいなくなつた日本人の家々に残された家財道具の略奪が横行し始めた。我々の社宅から道路ひとつ離れた隣に、三十戸ほどの市省庁日本人職員の官舎があつたが、ここに盗賊が押し入るのを目撃した。複数の男たちが、白昼堂々と玄関戸を打ち壊して家の中に侵入し、めぼしい物を持ち出そうとしている。その有様を遠くからこわごわ見ている日本人は、女子供ばかりで防ぎようがない。通報を受けたのか、そこへ一人の日本人警察官が拳銃を振りかざして、駆けつけて来た。盗賊の一人は、外に見張りを立てていたのであろうか、「衙門ヤメンライラ来了（おまわりが来たぞ）」という叫び声をあげると、いち早く一斉に飛び出し、脱兎のごとく逃げ出した。警官は、その背後に向けて拳銃を撃ちまくつたが、逃げ足速く、

とても銃弾の当たる距離ではない。警官はしばらく口惜しそうにしていたが、やむなく立ち去った。警官がいなくなるや、また新手の盗賊が現れ出る始末で、手の施しようがない状況だった。

### 三 佳木斯からの逃避行

いよいよ我々協和会の社宅の住民も南下避難する順番がきた。朝早く荷物を担いで、佳木斯駅に集合した。二年前に佳木斯に引越して来たときは、牡丹江經由の路線を使ったが、今回はその路線ではなく、松花江の北側を通る路線で、とりあえずハルビンに向かうとのことだった。列車は、各種の客車や貨車をかき集めて編成されていた。敵軍の迫り来る中、これほど多数の人間を短期間で一挙に列車で輸送するのは途方もない難事業であったと思うが、満鉄職員その他、これに携わり、遂行した人々のご苦労は想像するに余りある。

列車の進行中、戦局についてのニュースが車内で報じられた。それによると、日本軍は各地でソ連軍を撃退し、逆にソ連領内に攻め入り、既にウ

ラジオストックを攻略した模様であるとのことであつた。あとから落ち着いてみれば、どう考えてもあり得ない途方もない誤報だが、そのときは皆喜び、皇軍の華と謳われた精鋭関東軍は、いまだ健在なのだと言ふ三唱した。

あちこちで線路や橋が壊されているので、その修復のため列車の進行ははかどらなかつた。夜間の運行は極めて危険なので、その晩はとある駅に停車し、車中宿泊のこととなつた。北満の夜は真夏でも冷え込む。折悪しく雨が降り出した。我々協和会の社宅の者は客車に乗れたが、無蓋貨車に乗せられた人たちは大変だった。貨車の下にもぐり込み、線路の上で一晩明かさねばならない。乳幼児は母親と共に客車に集められたが、入りきれないので、我々年長の子供は車外に出て駅舎に入った。体調を崩す人が次々に出た。駅舎のコンクリートの床の上に腰をおろし、うとうとしていて、一人の女性が担ぎ込まれてきた。高熱を発して正気を失っているのか、絶えず大声でうわごと

を叫んでいる。心配そうについて来ている子供たちの中の最年長の女の子は、少し前に佳木斯に転校してきた同級生だった。苗字は、たしか桂さんと言った。弟妹と共に母親に取りすがり、懸命に呼びかけるが、うわごとはやまない。

翌朝、雨も止んだので、私は列車に戻ったが、この母親の容態は回復したのだろうかにかかったが、その後の状況は聞いていない。

その後、列車は途中で何度も長時間停車した。あるとき、近くの民家で竈と薪が使えるらしいと聞きつけ、母が弟を背負って数人の人と飯盒炊飯に出掛けた。しばらくすると、「線路の修復が終わりそうなので、まもなく列車は出発する」との知らせがあった。これは大変だと慌てて列車から飛び降り、母を連れ戻そうとしたが、地理不案内な所であり、居場所が分からない。遂には、半泣きになって走りながら探し回ったが、どうしても見付からない。列車は今にも動き出すかもしれない。決断しなければならぬ。妹は荷物と共に列車に

乗っているのだ。何が起ころうと、家族離れ離れになるわけにはいかない。こんな所に取り残されたらどうなるか分からないが、死ぬときは家族一緒にと、最初から決めているのだった。列車に駆け戻り、妹と荷物をおろそうとした。そのとき、母が飯盒をぶらさげて戻って来た。やはり発車の知らせがあったのだ。母はご飯が生煮えだところばしていたが、私は「何を呑気なことを言っているのだ。飯どころの騒ぎではない！」と無性に腹が立った。母は私が何を怒っているのか、さっぱり分からないようだった。結局のところ、列車はなかなか発車せず、飯盒炊飯に十分過ぎるほどの時間があったのだ。何とも人騒がせな話だった。

その後も、列車はまともには走らなかつた。列車の停車地点と宿泊場所との間、さらには駅と駅との間、重い荷物を担いで、長い道のりを何度も歩かされた。このとき、私の一家が携行した荷物について述べると、まず母は弟を背中に背負い、小型のトランクと革帯で縛って丸めた羽根布団を

両手に持った。羽根布団は軽くて保温力、防水性に優れ、野宿をした際でも親子四人が身を寄せ合えば、これ一枚で寒さを防ぐことができた。私は、最も重い品物である米その他の食糧や衣類を、大人用の大きなリュックサックに入れて担いだ。また、家の「常備救急箱」から取り出した薬品類や包帯、三角巾などを雑嚢に詰め込んで、肩から斜めにかけて。妹は、自分の衣類を入れた子供用の小さなリュックサックを担いでいた。

この重荷を担いでの強行軍は、さすがにつらかった。ほかに男手がないのだから、私が担ぐ以外にはない。家族の命を支える物だから、放り出すわけにはいかない。菌を食いしばって、皆から遅れないようにして行って行くだけである。

落伍する人々が出始めた。病弱な人や足の弱った老人を抱えた家族は、とてもついて来れないであろう。これまで、行動を共にしてきた協和会の社宅家族にも落伍者がでてきた。母親が地面に座り込んで動けなくなったり、放り出された大きな

風呂敷包みから、白い干しうどんの束が転がり落ち、ばらばらになつて道端に散乱した。「そんな荷物なんか捨てて、何とかついて来なさい！」と声をかけ、子供たちも母親を何とか助け起こそうとするが、体力、気力共に尽き果てたのか、どうにも起き上がれない。だれにも助ける力はない。見捨てて行く以外に方法がなかった。その後、この家族の消息は耳にしない。

道には、あちこちに捨てられた荷物が転がっていた。その家族が、これだけはどうしても必要だとそこまで担いできた貴重この上ない物だが、どうにもならず身の一部を切り離す思いで捨て去つたのであろう。幼児を引き連れての行軍は容易ではない。疲れ果てた子供は、ともすれば地面にしがみこもうとする。それを叱咤し、引きずり起こして連れて行かねばならない。子供がどうしても歩けなくなった場合は、子供を捨てるか、荷物を捨てて何とか子供を抱えて行くかのどちらかである。こんな状況の中で、満四歳半の妹は実にし

っかりしていた。今は生と死の境目にあり、もたもたしていれば死ぬしかないということが、本能的に子供心にも分かっているのだろうか？　どんなにぐっすり寝込んでいても、「さあ、起きて今から行くよ」と声をかけられると、さっと起きてすぐに自分のリュックサックを担いだ。道中も何の泣き言も言わず、懸命に大人たちについて歩いた。その健気な姿を見て、周りの大人たちも涙ぐんでいた。

地名は覚えていないが、ある田舎町に到着し、そこでしばらく逗留することになった。ここまでは曲がりなりにも列車を利用できたが、ここから先は列車による移動は不可能な様子だった。この地の協会の世話で民家を借り、共同生活をする事となった。そこへ、階級は下士官だったと思うが、佳木斯から撤退した部隊に所属し、社宅の何人かと顔見知りの兵士が訪ねて来た。この兵士の話では、我々の住んでいた社宅は、中の家財もろともすべて焼き払ったとのことだった。日本軍

がいなくなれば、家財は略奪され放題になるのは必至であり、また敵に利用されないよう、めぼしい建物はすべて火を放ったそうである。焦土作戦がとられたのだ。社宅の人たちは、とうとう帰る家もなくなったのかと溜め息をついたが、「なかに、家なんかロスケを使ってまた建てさせればいい」と、この下士官はまだ意気軒昂としていた。今の関東軍の力では、ソ連軍に到底対抗できず、敗北必至であることを重々承知しながらも、少しでも皆の気持ちを奮い立たせ、勇気づけようとしたのである。

八月十五日より一兩日あとのことだったと思う。この下士官が来て、終戦のしらせがもたらされた。玉音放送と原子爆弾投下の話があり、またこれまでのソ連軍相手の戦闘の実情も知らされた。女の人たちは、皆泣いていたが、戦時下の徹底した皇国民教育で洗脳されている私には、信じられなかった。無条件降伏など外国のすること、日本にはあり得ないことである。日本が負けるとは、一

億総国民が玉碎するときのことだと固く信じていたのである。

いずれにせよ、戦争に負けたのだから、武器類はすべて取り上げられた。社宅の人の中には、ここまで小銃を携行していた家族もいた。そして、少人数の日本人が固まっているのは危険なので、日本人避難民の集結地となる緩化の陸軍航空隊の基地に移ることとなった。

ソ連兵による略奪、暴行を受けたのは、このときの移動の車中だったと思う。何度も車内に押し入ってきて、まず腕時計や万年筆、さらにめぼしい荷物を次々と奪い取っていった。我が家では最初に、母がさげていた小型トランクが奪われたと思う。これは避難行の途中で錠前が壊れ、蓋があかないように外から紐で縛っていたが、中身は弟のおむつぐらいで、大した物はいなかった。しかし、次に食糧、衣類の入った大きなリュックサックを取られたときは、参ってしまった。これまで取られたら、これからどうすればよいのかと

考えると、何とも言えぬ絶望感に襲われた。

そのときである。母は車外に飛び降りて追いかけた。追いつがって取り戻そうとしたのだ。だが、「母は「駄目だった」と飯盒だけを手にして悄然と戻って来た。飯盒はリュックサックの外側にくりつけていたのだが、これに手がかかり、紐が切れて地面に転がり落ちたのである。飯盒だけが助かったが、これは陸軍が使っていた物で、少し大ききの異なる二つの飯盒を重ねて収納でき、ご飯と味噌汁が同時に作れて便利だった。その後もこれは最後まで手許に残り、役に立ってくれた。だが、思えば危なかった。ソ連兵が腹をたてて、母が撃たれたらそれまでだった。略奪に抵抗した場合、こういうことはよく起こっていたのである。

品物だけではなく、夕刻になると、ソ連兵は女性の身体を狙ってやって来た。赤ん坊を連れた女性性は、子供が泣き叫ぶと面倒なので、手を出しにくいようだ。そこで、子供のいない人には子供を渡して抱かせ、皆顔を伏せていた。とうとう一人

の犠牲者が出た。子供を連れていなかったこの女性、車外に連れ出された。三十分ぐらいして、その人は泣きながら戻って来た。

この略奪、暴行があったのがいつだったのか、実を言うとその後関係が正確に思い出せない。あるいは、ずっとこのあと、綏化の飛行場を出てから起こったことだったかもしれないが、はっきりしない。思い出すのに苦痛を伴ういやな出来事は、記憶の底に閉じ込め、無意識のうちに封印してしまったのだろうか？ あれから六十年後の今、何とかその封印を破ろうと努力するのだが、なかなかうまくいかない。何か、かたくなにそれを拒んでいるものがあるのかもしれない。

#### 四 集結地綏化にて

綏化の陸軍飛行場に到着し、次の南下避難ができるまで、ここで暮らすこととなった。日本人避難民が続々と集結してきた。我々は兵員居住区に入居できたが、あとから来た人々のほとんどは、広い格納庫のコンクリートの上で寝泊ま

りしなければならなかった。

現地の満人が穀類、野菜、果物などの農作物を滑走路の上に並べて、商魂たくましく露天販売を始めたので、金さえあれば飢え死にすることはなさそうだった。中には屋台の上での「卵のから揚げ」実演販売もあった。卵を割って、そのまま熱した油の中に落としこめば砕け散るので、いったん鉄の柄杓の中に割り入れ、これを徐々に大鍋の油に浸し、から揚げにする。味付けもなく、卵をただ揚げただけのものだが、動物性蛋白質に飢えた身には、大変なご馳走に見えた。

生活環境の激変、粗悪な食事で体調を崩す人が多くでて、大半の人が腹を下し、便所はいつも満員だった。ほとんど着の身着のまま、皆汚れてみすぼらしい格好をしていたが、その中でも際立って悲惨な様子だったのは、北満の奥地の開拓村からたどり着いた人々だった。この人たちは、我々のように列車を利用することもできずに、途中で子供を失い、何度も略奪に遭いながら、ほとんど

徒歩でここまでたどり着いたのだった。持っている食糧といつても、自らが育てて収穫したわずかな豆類だけだった。その悲痛な面持ちには、凄まじい苦難の跡が刻み込まれ、気の毒でまともな目を向けることができなかつた。

日が経つにつれて赤ん坊が次々に亡くなつていった。栄養不足や将来の不安で、母親たちの母乳の出も悪くなるが、ミルクがない。離乳食もない。病院などないし、医薬品も欠乏している。抵抗力を失つた乳児は、少し体調を崩すとすぐに死んだ。亡くなった子供は、飛行場の片隅に埋め、土を盛り、墓標代わりに棒杭を拾つて来て立てるのだが、この棒杭の墓標が見るうちに文字通り林立していった。当然のことだが、最初に子供を亡くした母親は「死ぬ間際まで、飲むものも食べるものも満足にやれず、可哀想なことをした」と泣き崩れる。だが、二番目の子、三番目の子と亡くなつたときは、もはや泣く気力もない。「また死んだか、仕方がない、うちの子だけではない。よその子も

次々に死んでいくのだから仕方がない」とつぶやくのみである。

こんな状況の中で、当時一歳二カ月の弟が生き残つたのは奇跡に近い。ほとんどの人は、安くあがるので共同炊事をしていたが、母はそれに加わるのを断り、自炊を貫いた。周りからは白い目で見られたようだが、弟の命はそれで何とか助かつたのではないかと思う。

怖いのは伝染病であつた。大勢の人が集まっているので、水不足で洗濯がまともにできない衛生条件である。赤痢やチフスなどの伝染病が蔓延したら、ひとたまりもあるまい。これは皆が心配していることで、生ものを食べないよう注意が呼びかけられた。我々一家も一切の生食を避け、キュウリ、トマトや梨、真桑瓜などの果物も、すべて煮て食べた。しかし、中には店頭で果物をかじる者もあり、見付かつて「死ぬのは、あなただけでは済まない。周りの人々をすべて巻き込むのが分からないのか！」と散々叱られていた。

半年以上ここで暮らしただろうか、ようやく汽車に乗って南下する日がきた。首都の、新京が目地的地である。その途上、停車中にまでもやソ連兵が貨車に押しかけて来て、何やら叫んでいる。腕時計を渡せ、さもないと列車を動かさないとやっているようだ。しかし、腕時計など奪い尽くされてだれも持っていない。そのとき、壊れて針の動かなくなっている時計を、捨てずに雑囊の底に放り込んでいることを思い出した。ためにに渡してみたら、嬉々として立ち去った。針が動こうが動くまいが、問題ではないのだ。時計の形さえしていれば良いらしい。腕時計はソ連では極めて高価な貴重品であり、これを一つ売れば二、三年は遊んで暮らせるとの話を聞いた。しかし、これほど大量の腕時計をかき集めて、いちどきにあふれるほどソ連国内に持ち込めば、その値段は見るも無惨に暴落し、彼らもすっかり当てが外れたことだろう。

物品、財貨の強奪は個々の兵隊による略奪行為

にとどまらず、組織的にも行われた。南下する我々と反対に、北上する貨物列車に何度も出会ったが、いずれも貨物を満載していた。ソ連軍は満州占領中に、ドアの取っ手に至るまであらゆる工業製品、資材などを奪い尽くし、戦利品として自国内に運び去った。日本は、別の形で苛酷な支払いをさせられることとなる。北行する貨物列車は、品物だけでなく人間も満載していたのである。

昼間は夏の陽に照らされて、貨車の鉄板が焼け、貨車内の温度が異常に上昇し、飲料水の枯渇に苦しんだ。幼い子供たちが水を求めて泣くが、水筒は皆空っぽである。ようやくある駅に停車し、この水道から水が出ることを聞きつけたが、ソ連兵がうようよしているのです、女の人は恐くて車外に出られない。男の子なら大丈夫だろうというところで、私が周りの人々の水筒を集めて駅舎に入り、水を詰めて帰った。水道水でも大陸の生水をそのまま飲むのは危険だが、脱水症状で倒れそうなのだから、背に腹は代えられない。皆、むさぼるよ

うに飲んだ。

道中長かったが、ようやく新京駅に到着。これまで一緒だった佳木斯協和会の社宅の人々とも、ここで別れることとなった。社宅で我が家から三軒ほど離れた家に、高橋さんという家族がいた。

三歳と一歳くらいの二人の男児がいたが、既に上の坊やを綏化で失い、下の坊やも新京までの車中で亡くした。ご主人は現地召集され、国境付近の部隊に回されたが、同じ部隊に属し辛うじて生き帰った人から、「高橋さんが挺進隊員として爆薬を抱え、ソ連戦車の下に突っ込んでいくのを確かに目撃した」との知らせがもたらされた。これでもはや、万に一つの生存の見込みもなくなった。

一年前の夏の日のことだったと思うが、ある情景が目に見えなくなった。暑いので上の坊やは上半身裸だったが、おへそが前に少し突き出ていた。近所の腕白坊主が「やあ、出べそだ」とからかったが、高橋さんは笑いながら「何だ、知らないのか。へっこんだおへそは普通の兵隊のへそだけど、大将

のおへそは生まれたときから出べそなんだぞ」と答えた。腕白坊主は本当にそんな決まりがあるのかと、眼を白黒させていた。平和な日だった。その日から一年経つか経たずして、この父子ともどもこの世から消え去る運命になったとは……。今思い返しても胸がつまり、言葉にならない。

関東軍の一部上層部は、在留邦人を置き去りにして、家族と共に最優先で早々と逃げ出したという話を聞く。しかし、国境最前線の下級将兵は、圧倒的に劣勢な戦力で勇戦し、次々と全滅していった。短時日ではあるが、実に貴重な時間を稼いで頂いた。そのお陰で、我々は終戦時点までに、戦場と化した地帯から何とか離脱できたのである。

## 五 新京での生活

新京には、母の妹である叔母の三好馨が住んでいた。そこに家族四人転がり込んで同居させてもらうこととなった。叔父の三好清成は応召し、二歳の女兒の清美ちゃんとの母子家庭で、叔母は第二子をお腹に抱えていた。叔母一家は、新婚当

初奉天に居住していた。我々一家が華北から佳木斯に引越す途中、奉天の福本家（父の長姉宅）に数日間逗留したが、その際そこを訪ねたことがある。その後、新京に転勤となり、叔父の勤務先である馬事公会の社宅に移り住んでいた。馬事公会は満州国内の馬匹の育成、品種改良などに従事していた公営機関で、競馬の元締めでもあった。社宅は市内指折りの大通りである興安大路に面し、中庭をはさんだ二棟建てで、三十所帯ほど居住していた。

手持ちの現金が底を突きかけていた。いつ日本に帰れるか分からず、それまで生きていくための生活資金を稼がねばならない。ほとんどの日本人が生活基盤を失い、収入源を絶たれていて、慣れない商売を始める人々も多かった。私たちは、まず最初に大福餅の行商を始めた。早朝、出来立ての大福餅を仕入れ、市内の日本人家庭を回って売り歩くのだが、なかなかうまくいかなかった。各家庭とも家計が苦しく、それほど売りさばけない。

母と共に大福餅の入った箱を担いで、一日中歩き回るのはかなりの重労働であり、日本人だけを相手の商売は限界がある。日持ちしない品物であり、売れ残った分は丸損である。これは一カ月ともたずに取りやめ、次は菓子類の露天販売をした。朝早く商店街の吉野町で仕入れ、自宅前の興安大路の歩道上に台を置いて商品を並べた。興安大路はかなり人通りが多いので、そこそこの売り上げはあった。何か現地中国人の好みそうなものをと、母は餃子ギョウザを作り、台の上で揚げ売りもした。

あるときは、菓草のゲンノショウコが自生している所を見付け、摘み採って陰干しし、袋に詰めて売った。これは箱に入れて、首にかけた紐でつるして前に抱え、もっぱら私が路上で売り歩いた。このように、菓子類や煙草などを売り歩いている日本人の少年を、あちこちで見かけた。佳木斯の級友で、最も親しかった仲間の一人である中村恭輔君に出会ったこともある。彼はお菓子の「かりんとう」の箱を抱えて売っていた。

後年の話になるが、中村君は内地帰国後、昭和三十三年に九州大学の電気工学科を卒業、富士通信機に入社した。彼は大学入学直後、私の居所を知って手紙を寄こしてくれ、以後互いに文通できるようになったのだが、それにはある偶然の出来事があった。というのは私の小倉五中、小倉西高校時代の級友で、九大数学科に入った余宮功一君が、大学の寮でたまたま中村君と同室だった。あるとき余宮君が、寮の室内で私宛の葉書を書いていたらしい。そのときたまたまその宛先を見た中村君が、「ちょっと待ってくれ。僕はこの男を知っている」ということで、私の消息をつかんだのである。

やがて冬が訪れ、叔母の出産時期が迫ってきた。佳木斯で、弟が生まれたときにお世話になった年配の助産婦さんが、新京に来ていることを母が聞きつけ、居所を探し当てて再会し、出産当日に立ち会ってもらったこととなった。二十年十一月二十五日の払暁、自宅内で男児が誕生した。偶然にも、

母の誕生日と同月同日だった。母の発案で、晃一と名づけられた。三好晃一君は、成人後弁護士となり、現在下関市で法律事務所を開設して活躍している。

冬の夜は虱取りで忙しかった。これを家に持ち込んだ犯人は私だったらしい。あるとき、近所の子供仲間と近くの体育館に入ったことがある。中の施設は大方奪い去られて荒れ放題だったが、剣道の竹刀や防具が数着放置されているのを見付け、仲間と持ち帰った。これが虱の巣だったらしい。衣類をときどき熱湯消毒するのだが、なかなか根絶しない。そこで厳寒の夜、一晚戸外にさらして凍死させようと試みた。気温は零下二十度くらいまで下がる。翌朝、取り入れた衣類はパンパンに凍って、板のようになっている。人間ならば完全に凍え死んでしまうが、奴らは恐ろしく寒さに強い生き物だった。衣類が暖まって柔らかくなると、また、もぞもぞと動きだしていた。

年が明け、ようやく暖かくなり始めたころだっ

たと思う。弟が風邪をこじらせたのか、体調を崩し衰弱していった。母は病院に通い、何度か自分の血を弟に輸血した。弱った赤ん坊を救うには、その母親の血が最も効果があるらしい。「母血注射」というのだが、母も弟も同じA型ではあるが、若いころ二度も肋膜炎を患い、決して強健とは言えない母の身体に良いはずはない。だが、母は何としてでも子供を元気なまま日本に連れ帰ろうと、死に物狂いだったが、現に弟は死にかけている。周りは、はらはらして見ているだけだった。この効果があったのだろうか。次第に弟は回復した。

やがて春になったが、商売敵が増え、露店販売の菓子類の売れ行きが悪くなっていった。何か別の商売を考えた母と叔母が、古着の路上販売に取り組んだ。菓子屋よりかなり実入りは良いが、なかなか大変な商売であった。相手は、主に現地中国人である。中には悪質な客もいて、日本人なら脅せば何とかなると、暴力まがいの行為に出て、安値で商品を持ち去ろうとする。こういう連中に

負けずに渡り合うには、気力と度胸が要る。しかし、いつも喧嘩腰では商売にならない。ときには客の機嫌をとり、冗談も言って笑わせないと売らさばけない。内地帰国の間際まで、この商売が続けられた。

## 六 国共内戦と八路军

ソ連軍が撤収したあと、これに代わって新京に進駐したのは中央軍（国府軍）である。長い列を作って興安大路を進んで行ったが、鉄砲と雨傘を束ねて背中にくくり付け、鍋釜や布団などの所帯道具を天秤棒の両端に吊り下げた、奇妙な出立ちの兵隊だった。

既に内戦の火が中国全土に広まっていた。華北地域で活動した共産党軍の八路军が、新京に接近しているとのうわさが流れ始めた。

ある日の夕方、町の人通りが途絶え、異様に静かになった。銃声や砲撃の音が遠くに聞こえ始め、それが次第に近づいてきた。銃弾を防ぐために、家中の畳をはがして窓に立てかけた。夜になると

市街戦になり、興安大路が主戦場の一つになったようである。銃弾が家の窓ガラスを突き抜ける音がした。家族全員、布団を頭からかぶり、畳をはいだ床に伏せ、身を低くしていた。

明け方近くになると、付近の銃声がやや静まった。何かただならぬ雰囲気を感じるので、恐る恐る窓から外を見ると、中庭で百人近い八路軍兵士が重機関銃を囲み、目白押しに詰めている。やがて突撃ラッパが鳴り、隣のビルにたてこもる中央軍への総攻撃に移った。朝には、市内の中央軍は全面降伏した。

その夜は十発近い銃弾が家に飛び込んでいた。後でその跡を調べてみると、銃弾というもののスピードが速いため、窓ガラスには小さな丸い穴があくだけであり、穴の周囲に少しひびが入るが、そのガラスが割れ落ちるといふことはない。また、畳は突き通されることなく、立派な盾になってくれた。

興安大路には死体があちこちに転がり、中庭に

は無数の葉莖が散乱していた。その夜は、社宅の住人に被害はなかったが、戦闘がほぼ収束した朝になって、悲劇が起きた。庭に出た叔母が「日比野さんの奥さんがやられた！」と、真っ青な顔で駆け戻った。日比野さんは社宅の中庭に出て、辺りを眺めていたらしい。そこへ、どこからか飛び込んできた流れ弾が、中庭を囲む内壁に斜めに当たってはね返り、運悪く頭部を直撃した。数時間近く息があつたようだが、やがて絶命した。日比野さんは、満一歳くらいの男児との母子家庭であり、問題は遺されたこの赤ん坊をどうするかだった。周囲の日本人は、自分とその家族が生きることに皆精いっぱいであり、よそ様の乳飲み子を預かり育て、日本まで連れ帰る余裕はだれにもない。社宅の人が奔走し、幸い中国人家庭のもらい先を見付けることができた。

当時の日本人家族では、親が死ねば（多くの家は片親だけである）遺された子も死んだも同然に近い。少なくとも、日本人として生き長らえるこ

とはできない。このように親に死なれた幼子が、現地中国人にもらわれた話はよく聞いた。後年、中国残留孤児の存在が問題となり、多数の孤児たちが新聞紙上でも紹介されたが、これも実際に発生した数の一部に過ぎないと思う。私自身少しでも運命の歯車が狂えば、どうなったか分からない。あまり想像したくないことだが、もし母を失っていたならば、小学生の私一人では弟妹を養い育てる力はない。もし、弟妹が中国人のもらい子となつたならば、到底私一人で日本に帰る気持ちにはなれない。父は生死不明で、再会することは半ば諦めていたし、内地に帰ることに、もともとそれほど魅力を感じてはいなかった。当時の心理状態を考えると、恐らく自ら中国残留孤児になる道を選び、ゆくゆくは八路軍にでも加わろうとしたであろう。

一夜にして新京は八路軍の手に落ちた。華北にいたころ、八路軍の話はよく聞かされた。前に述べた定県に住んでいたとき、日本軍の歩兵一個連

隊が同地に駐屯し、その守備と共に八路軍の討伐に明け暮れていた。連隊長の新見大佐は人情味厚く気さくな人柄で、麾下の将兵からも慕われていたようだ。当番兵が連隊長居室の掃除に伺うと、連隊長は「これは、ご苦労。よし、わしも一緒にやろう」と箒を取り、当番兵と共に働いたと聞いている。

定県に居住する日本人家庭はごくわずかであり、予備役砲兵少尉の父が在郷軍人会の会長であった関係から、新見連隊のいろいろな階級の将兵が、よく我が家を訪れ、八路軍相手の戦闘の話をした。勝ち戦の話はほとんど聞いたことがなく、いつもしてやられた話だった。八路軍が集結しているとの情報を得て討伐に赴くと、もぬけの殻で、決まって後方をたたかれる。彼らは日本軍に比べ、持っている武器ははるかに貧弱である。日本軍のように、背後に軍需工業を抱えているわけではない。戦車や航空機はない。大砲も重砲類はなく、小型の迫撃砲程度である。だが、軽装で山野を駆け巡

り神出鬼没、履いている靴も日本軍のような重い軍靴でなく、軽い布製である。これは裏側が丹念に刺子縫いされ、布製ながら堅牢であり、兵士個人の身近な女性が作るものだと言った。母親か、または妻か、はたまた恋人か。その兵士の無事を祈りながら、一針一針に心を込めて縫い上げるのである。彼らのことを語る日本軍将兵の口ぶりには「あまり大きな声では言えぬが、敵ながらよく戦う」との半ば畏敬の念が込められているように感じられた。しかし、このような居所の分からぬ姿の見えぬ敵、特にしばしば民衆の中に埋没する敵を相手にする戦いは、大変汚く醜い戦争になりがちである。

余談だが、新見大佐はのちに少将に昇任し、佳木斯駐屯部隊の視察に来訪したことがある。「新見閣下が来られる。粗相のないように」と現地部隊はもとより、官民あげて出迎えに大童だったよのだが、市主催の歓迎会に私も父に連れられて出向き、久しぶりに再会した。新見さんは、「あのと

きの坊やが、こんなに大きくなったのか」と懐かしそうにしておられた。

八路軍の治下、町の治安は目に見えて良くなったようであり、日本人への暴力行為も影をひそめた。占領当初、兵士たちは民家に分宿し、我が家にも数人がしばらく逗留した。話に聞いていた八路兵と身近に接するようになったのだが、彼らは軍隊臭さを感じさせない不思議な軍隊だった。いずれも精悍な面持ちだが、何か青年団のような感じである。階級はあるようだが、階級章はつけてなく、上下間が比較的自由な雰囲気だった。また、そういう規則になっているのか、炊事も自分たちで煮炊きし、残った物を我々に持って来てくれたこともある。我々への応対も、おおむね礼儀正しく丁寧だった。

ある日突然、八路軍は一兵残らず煙のように新京から姿を消した。代わって中央軍が再び進駐して来たが、今度は軍服も真新しく、米式装備で身を固めた精鋭部隊だった。彼らは、日本人はもと

より、現地民衆に対しても高圧的で居丈高いただけかだった。

#### 七 通貨について

当時のこの地域の社会現象として、後から思い返して不思議に思われる事柄がある。それはここで流通していたお金、通貨のことである。当時数種類の紙幣が、その価値を変動しながら通貨として市場に並存していた。まず、旧来の通貨であった満州国の中央銀行券がある。また、ソ連軍は満州占領中に大量の軍票を発行した。これは赤か青の原色刷りでけばけばしく、品位のないお札だった。ソ連軍撤退後もしばらく流通したが、やがて「南の大都市奉天では、もう使えなくなっているらしい」とのうわさが流れた。こうなると、だれも最後に「ばば」をつかみたくないの、早く手放そうとする。または、これで代金を受け取るのを渋るようになる。十円の品物の売り買いでも、これで払うならば十五円だ、数日後には二十円だ、と次第に価値が下落していき、いつの間にか市場から全く姿を消した。

中央軍と八路軍、それぞれの軍票も市場に回収した。ソ連軍は平和裡に撤退したので、徐々にその軍票の価値が下落したのであるが、戦争で支配者が入れ替わった際の価値の変動は劇的であった。昨日まで使えていたお金が、一夜明ければただの紙屑と化している。もし敵方の軍票を使っているのが見付かれれば、すべてこれを没収されるだろうし、処罰を受けるかもしれない。しかし、支配者がまた入れ替われば、額面通りの価値を再び取り戻すであろうから、今は使えないが、潜在的な価値はあると言える。さらには日本銀行券も流通したが、これは特別の値打ちがある紙幣で、プレミアム付きだった。恐らく一部の余裕のある日本人が、帰国後の生活に備えてこれを手に入れようとしたからだろう。情報不足で、一人当たりの持ち帰り金額は厳しく制限され、またたとえ持ち帰れたとしても、新円切替で、旧札はそのままでは使えないということを知らずに、である。しかし、他の紙幣に比べ、これはもともと少量しか

市場に存在しない。それをかき集めようとするれば、需要と供給の原理で当然値段が上がる。

このように各種紙幣の価値が変動する中で、なぜか旧満州国の中銀券だけが、常に額面通りに通用した。お金というものは、人類の発明品の中でも最も奇妙な代物の一つであろう。金属貨幣はまだしも、現代の主要通貨である紙幣は、それ自体ほかにほとんど使えない紙切れに過ぎない。その紙切れが、一般的交換価値を有する「現なま」として、市場でほぼ万能の威力を発揮するのは一体なぜか。その理由として、経済のどの本にも同じことが書かれているようだ。それはひとえに一国の政府が公権力を持って、それに強制通用力を与えているからにほかならないとしている。だが、それだけではどうも説明しきれないようだ。満州国の崩壊と共に、その発行紙幣の効力を保証する公権力は、どこにも存在しなくなつたはずである。にもかかわらず、この紙幣の値打ちを失わなかつた。というよりも、むしろ他の紙幣の相対価値が

消長する中で、これだけが一貫して額面通りの価値を保持し、いわば「基軸通貨」の役割を果たしたという事実は何を物語るのか。今さら原始的な物々交換に戻れない市場経済自体が、そのときの政治情勢に左右されずに、こういう通貨の存在を要求するからなのか。これは、どこの国でも起こり得る、一つの経済原理なのか。それとも、したたかで現実的な中国民衆の国民性に基づく、特異な現象だつたのか。いまだによく分からない。

#### 八 内地引揚げと帰国後

昭和二十一年の夏を迎え、ようやく内地引揚げの日がきた。だが、私自身の正直な気持ちとしては、あまり嬉しくはなかった。大人の人たちにとっては、待ちに待った懐かしい故郷への帰還であろうが、大陸で生まれ、物心つかぬうちから「東より光は来たる」の満鉄社歌を聞かされて育つた私にとって、故郷とは赤い夕日の沈む限りなき地平線である。日本人は、ほかに生きる場所がないのだから仕方がないが、あの狭い島国で暮らすこ

とになるのかと、いささか憂鬱な気分だった。

無蓋貨車で南新京駅を出発、錦州で十日ほど待機したあと、船が到着したので葫蘆島の港に向かった。乗船手続きのため、その広場で立ったままかなり待たされたが、折悪しく雨が降り出した。雨具などないし、濡れるままでいるほかない。叔母が背負っている晃一君の身体が冷え、顔が青ざめていくのが心配だった。背中の大きなリュックサックが水を吸って肩に食い込むが、地面はぬかっついて置く場所がない。約一時間後、米軍のトラックが来て、乳幼児と母親や大きい荷物を、埠頭まで運んでくれることとなった。重いリュックサックから解放され身軽になった私は、かなり距離がありそうだが、埠頭に向かつて歩いた。その途中で、アメリカ兵の運転する小型ジープが拾ってくれた。戦前、北京にいたとき、公使館街などで欧米各国の兵隊をよく見かけたが、戦後アメリカ兵に出会ったのは初めてだった。運転していた男のまくり上げた腕に大きな刺青いれずみがあり、戦時中、

鬼畜米兵という言葉を散々聞かされていたので、ちよつと恐かったが親切だった。

我々が乗る引揚船は日本海軍生き残りの駆逐艦で、艦装兵器はすべて取り払われていたが、船腹に大きな日の丸が描かれていた。久しぶりに見る日の丸だった。この一年間、日本国旗など持ち出せば、とんでもないことになったのだ。艦名は「宵月よづき」と言い、艦長以下、乗組員の一部がそのまま艦に居残って引揚げ業務に従事していた。艦隊勤務で鍛えぬかれた乗組員たちは、いずれも筋骨隆々として血色優れ、日本人といえ、やせて青白い顔しか見慣れていない目には、別の世界の人間のように眩しく映った。

これで、このまま何事もなく平穩に日本に到着すると思っただが、そうは甘くなかった。台風圏内に突入したのか、大時化に見舞われた。その夜、船の揺れが次第に激しくなり、だれかが不用意にあげていた船室の丸窓から、海水がどつと流れ込んだ。慌てて窓が閉められたが、バケツ三、

四杯ほどの海水が流れ落ちて床に溜まった。やがて船は突き上げるように揺れだし、皆ひどい船酔いで苦しんだ。だれかが食べた物を床に吐き出すと、伝染したように次々と嘔吐し始める。私も胸がむかむかして耐えきれず、遂に胃の中のを吐き出したが、そのあと気分がすつきりし、船酔いもほぼ収まった。

兵員居住区であった船室は上下二段に分かれ、私たち乳幼児を抱えた家族は下の段が割り当てられた。そこに寝転がっていたのだが、上の段から一本の細い紐がぶらさがり、振り子のように大きく揺れていた。その揺れ方が何か不自然なのでよく見ると、それは紐が揺れているではなかった。紐は重力に引かれて真つすぐ下に垂れ、ほとんど静止しているのだが、船が大きく傾くので紐が揺れていると錯覚したのである。

船室内は、異様な臭気がたちこめていた。皆が床にぶちまけた吐瀉物が、流れ込んだ海水の上に漂い、船の揺れに合わせて船室内を動きまわって

いる。これにペンキ臭の入り混じった船室特有の臭いが加わり、何とも形容し難い。少し外の空気が吸いたいと思いい、船室を出て甲板への出入り口に向かったが、そこまでの短い通路を歩くのが大変だった。通路の床がぐつと上に突き上げられ、体重が一挙に二倍になってよたよたする。と思うと床がすつと下に落ち込んでいき、身体が宙に浮いたように足もとが定まらない。手すりにつかまり、ようやく出入り口までたどり着いた。外の風雨が激しくたたきつけ、ドアの隙間から外気が漏れこむので一息ついた。窓から外を見ると、凄まじい光景である。空と海との見分けがつかないほど荒れ狂っていた。

大嵐は一昼夜近く続いたが、やがて収まった。一時は避難信号も出したそうだが、激戦生き残りの堅牢な駆逐艦は何とか乗り切った。その後は穏やかな航海が続き、自慢の隠し芸を披露し合う演芸会も甲板上で開催された。乗組員もこれに参加したが、芸達者な人が多かった。また、乗組員は

引揚者の話の中に加わり、海戦の実態も聞かせてくれた。ミッドウェイ海戦で大痛手を受けて以来、負け戦の坂を転がり落ちていった事、末期には国民は連合艦隊が出動し、一大決戦を挑むことを期待していたようだが、連合艦隊なんかどうの昔になくなっていったことなど、大本営発表しか聞かされていなかった我々が初めて聞く話だった。

嵐のため、かなり日程が遅れて博多港に到着。

検疫のため一週間近く港外で待たされたあと上陸、博多の収容所で一泊後、母と叔母の親元である北九州小倉の平山家に向かった。その家が、空襲で焼かれずに残っているだろうかと心配だったが、近づいて健全な姿を目にし、胸をなでおろした。大きな造兵廠のある小倉は、広島次の原爆投下予定地だったそう。原爆でいずれ壊滅させるのだから、大規模空襲の必要なしとアメリカ側が判断したのか、他の都市に比べて小倉は空襲の被害が軽かったようである。八月九日当日の天候条件により、小倉に代わって次の候補地であった長崎

が無惨な犠牲となったのだが、当時はこのような事情を知る由もなかった。

帰国後も生活の糧を得るため、母は働きずくめだった。住居も、いろいろな事情で小倉と本籍地の下関の間を行ったり来たりした。私は丸一年間学校に通っていなかった。小学校の高等科には入れるようだが、入学試験制度のある旧制中学には入れない。中学に入学するには、小学六年をやり直した方が良いと言われ、下関の安岡小学校の六年生となり、一カ月後に小倉の清水小学校に転校した。ところが、翌二十二年、学校制度が六三制に改編された。中学が義務教育になったのだから、高等科に入っていたら、後れなくて済んだのである、そのときは一学年損をしたように思った。しかし、もしそうしたとしても、その後高校、大学と順調に進学できた保証はないわけであり、また人生で一年くらい遠回りすることも悪くはあるまいと思う。

父の生死、消息は、帰国後も長らく不明だった。

ソ連抑留者の帰国は既に始まっていたが、ある日突然、東京の能井田栄二さんという人から長文の手紙がきた。能井田さんは、ソ連邦ウズベック共和国の首都タシケントの収容所で父と共に抑留生活を過ごし、帰国後すぐに連絡してくれたのである。手紙はこれまでの経緯を克明に述べ、「将校さんは帰国が後回しになるようだが、お元氣なので安心なさるように」と結んであった。この上ない朗報である。「良かった、良かった」と、母子ともども泣いたり笑ったりして喜んだのは言うまでもない。

後年、私は東大受験の際上京し、初めて能井田さんにお会いした。能井田さんは、中目黒にある兄上の能井田栄一さんの家のそばで、菓子屋を開店していた。私は受験中、兄上のお宅に泊まらせて頂き、入学後も中目黒は駒場の寮からそれほど遠くないので、しばしば伺った。

やがてソ連が手紙の差出しを認め、父からも直接手紙が来るようになった。父は二十四年に帰国

し、「中央アジアのシルクロードの果てまで連れて行かれて働かされるとは思わなかったが、シベリアのような酷寒の地でなかったのは、まだ幸運だった」と述懐していた。しかし、長期にわたる粗悪で不十分な食事による栄養不足のためか、歯の衰えが甚だしく、帰国後四十台半ばで、ほとんど総入歯にせざるを得なくなった。

その父が、八十九歳で亡くなって十三年が過ぎた。九十三歳の母は存命だが、すでに足腰が立たず、寝たきりに近い。両親とも、戦争とそれがもたらした結果に振り回され、内地引揚げ後も安定した収入が得られず、苦勞の尽きない人生だった。しかし、家族全員だれ一人失わなかったことが何よりの慰めであり、また誇りでもあったと思う。大人も子供も、多くの人々が次々と亡くなっていく中で、幸運に恵まれたとも言える。しかし、その背後に実に多くの人々による助けがあり、その恩恵を蒙っていたことを、この記録を綴りながら今さらのように痛感した。

当時の非常事態をくぐり抜けた数多くの人々の中で、このような記録を書き残す機会を与えられた者は、ごく一部にしか過ぎないであろう。しかし私自身の経験した苦勞など、物の数には入るまい。とりわけ、今や永久に物言えぬ人々、非業の死を遂げられた人々の思いを代弁するほどの資格はない。

戦争は、この世で最も大切なものとも言うべき平和な家庭を無残に引き裂き、無数の人々の生命とその未来を奪い去った。このような結末に至った最大原因として、当時の国のあり方、統治体制や国策に重大な誤りがあったことは、疑い得ない事実だと思う。亡くなった人々の死を無駄にせず、その霊をいささかでも慰めるには、かつての日本のたどった道を、決して二度と歩まないことである。

## 母子のあてどなき避難行

香川県 森 ミヨ子

### 一 満州移住までの生活状況

私は、大正十一（一九二二）年八月十五日に当時の香川県三豊郡仁尾町で生まれました。姉兄妹の九人きょうだいでしたが、三男の兄がそのころ流行したジフテリアで、また姉はお嫁に行ってから、さらに次男の兄は復員してからそれぞれ死亡してしまい、結局は六人兄妹になってしまいました。

父は天産物の仲買問屋をしていて、農家の人が作った唐辛子とか除虫菊とかの乾燥した物を買って、薬品会社やカレーソース会社と売買取引をしていました。父はそれぞれの品物の品質を確かめて等級を付けて、その品物の値段を決めたりしていました。長男の兄もその仕事をしていて、父を手伝っていました。母は、先方が持って来た